



教会は10月を「世界宣教月間」としています。特に10月の終わりから二番目の日曜日を「World Mission Sunday, 世界宣教の日」と定めています。2021年は10月24日です。皆さん、ちょうど3週間前私たちの共同体、府中カトリック教会はPIME DAY を祝いましたね。その時私は、私たち宣教師司祭の使命は福音宣教と申し上げました。同じメッセージをもう一度届けたいと思います。私が宣教師司祭になりたいと思った理由はシンプルです。イエス様の喜びを人々に伝えたいからです。イエス様のミッションは何かすごいことをすることではありません。ありのままの自分の生き方を姿勢と言葉でイエス様の喜びを多くの人々と分かち合うことです。もちろん、福音を宣教することは、ひとり司祭や修道者の固有の使命ではなく、すべてのキリスト者、教会共同体の大切な使命であります。

さて、今日は教皇フランシスコの素晴らしい黙想をご紹介したいと思います。今年、教皇様が選んだテーマは、「「わたしたちは、見たことや聞いたことを話さないではいられないのです」（使徒行伝4:20）というテーマです。今日私は教皇様のメッセージの二つの中心点だけを紹介したいと思います。

教皇フランシスコは、「世界宣教の日曜日」のメッセージの中で、次のように述べています。

「神の愛の力を体験し、私たちの個人や共同体生活の中で御父の存在を認識すれば、私たちは見聞きしたことを宣べ伝えずにはいられません。イエスの弟子たちとの関係と人間性は、神が私たちの人間性をどれほど愛し、私たちの喜びや苦しみ、希望や懸念を自分のものとしているかを示しています。（第二バチカン公会議『現代世界憲章』22参照。キリストにおける何もかもが、わたしたちの生きる世界とそのあがないの必要性を示しています。つまり我々の生きる世界はキリストにとって他人事ではないことを思い起こさせます。また、キリストは私たちが宣教活動に積極的に加わるよう呼びかけています。）

「町の大通りに出て、見かけた者はだれでも婚宴に連れて来なさい」（マタイ22・9）。キリストにとってだれもよそ者ではありません。このあわれみの愛を、自分とは無関係なもの、縁遠いものと思う人はいないのです。」

この力強いメッセージは、イエスが世界中のすべての人々のために来られたこと、そしてイエスのミッションに参加するよう、私たちを招いていると語っています。実際、私たちは単に使命を知っているということではなく、救いの使命を担うように語られているのです。このことは私たち全員にとって本当に重要なことです。

教皇様のもう一つの非常に興味深いメッセージの中心点は次のことです。

「わたしたちはキリストに従って生きた人々のあかしをおさめた使徒言行録を持っています。この書物は宣教する弟子たちが常に大切にしてきたものです。福音の香りがどのようにして広がったかを書いています。また、主の靈のみが与えうる喜びをどのように人々を呼び覚ましたかを記した書です。使徒言行録はわたしたちに、キリストを胸に抱くことによって試練のなかでも生き生きと生きることができると教えています。わたしたちも同じです。今のこの時代も、生きることはたやすくはありません。特にパンデミックという状況の中で、すでに多くの人が苦しんでいます。パンデミックの状況は、生きる苦しみ、孤独、貧困、不正義を明らかにしました。また私たちがいだく安心感、私たちを知らず知らずに引き裂く細分化や分極化を露わにしました。もっとも弱くて傷つきやすい人が、なおいっそう脆弱に、壊れやすくなっています。わたしたちは落胆し、幻滅し、疲労し、希望を奪われました。このような状況の中でもあきらめの気持ちに、視野が遮られてしまったのです。けれどもわたしたちは、「自分自身をのべ伝えるのではなく、主であるイエス・キリストをのべ伝えています。」（ニコリント4・5）

教皇様のメッセージの通りわたしたちはそれぞれの生きる場での福音宣教者となることが求められています。それぞれの置かれた場にあって、自分の生きる姿勢と言葉をもって、喜びのうちに証して参りましょう。すべてのいのちは神から愛されているのだ、愛されていないのちはないのだ、というイエスの福音を証ししてまいりましょう。